

Title	摘録
Author(s)	
Citation	地球 (1929), 12(5): 386-387
Issue Date	1929-11-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183679
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

摘錄

○今西龍博士、洩水考

(朝鮮支那文化の研究
第一輯 刀江書院發行)

朝鮮に古く知られてゐる河に洩、沮、帶の三水がある、此三水が今日のどの川に當るか、明白でない限り朝鮮の古代地理は明にならぬ。處が昭和二年九月、今西博士が平安南道龍岡郡に於て偶然に粘蟬縣碑を發見されたために洩水が大同江であることが確證された、従つて帶水は漢江であり、沮水、は清川江であると考へられるのであるが、こゝでは洩水のみを論じてある、曰く、

山海經海内北經には、朝鮮在列陽東、海北、山南、列陽屬燕とあり朝鮮今樂浪縣箕子所封也、洩水亦水名也、今在帶方帶方有列口縣といふ郭璞の注がある、又漢書地理志樂浪郡吞列縣原注にも

分黎山、洩水所出、西至粘蟬入海、行八百二十里

とあつて、漢代は明に今の大同江を洩水と知つてゐたのである。三國地理志をみると、粟口一云粟川、今股栗縣と記し、東國輿地勝覽にも股栗は本の高勾麗粟口、一云粟川とあるから、粟口は列口で、これは大同江の南岸をさしてゐる。従つて洩水の位置は疑ふべからざるものであるが、後世麗道元が水經注をつくつた時、誤つて大同江を沮水としたので、朝鮮人までが洩水を沮水にしてしまつたのである。さてこの川の

名について考ふるに、日本書紀辛酉十二月の條には、高言惟十二月、於高麗國寒極沮凍云々

とある、沮を日本假名でエと讀んである。新井白石は、

國語、江、エ義不詳、天智紀に高麗國寒極沮凍れりといふ

事をしるされ、沮の字讀でエといふなり、即沮江也、沮讀で

エといふは彼方言によれる所なり、さらば此にして江をエといふ事も、彼方言に出しも知るべからず、と記したのは卓見

である。蓋し大同江を高勾麗人はエといつたので、日本書記

はその土語を移したのであらう。平壤の壤は儒、穰、讓の

字と同じく古は奈行音であつて、那、内、難、奴、努、惱、

而、耐など同音の假字に使用せられてゐた、川といふ語は

や生レ、成ル、世または日などの語のニを此等の文字

を假りて表示してゐる。ナルはナ、ニはニ、ニは地方など

の意味もある、蓋し平壤の平は坪又は評と同じ意である、評

は日本でコホリと讀んだ例がある。伐即ハをコホリとも訓

んだ例が日本紀にある、ボールもコホリも畢竟同一の意義で

あるから、高勾麗の舊都、不耐城の不耐と耐字に代ふる

に内字を以てせる國內城も、新都の平壤も、同一の意義の名

稱であらう。平壤河は恐らく平那と呼んだであらう。併し一

方にはエと訓んだことも明である。予は此のエは高勾麗の當

代語の川即ナ、若くは内の語から直接に出來た説でなく、洩

水の例の語から移つてきたものと考へる。列は國音レツ朝鮮

音ロツであるが、古音は入聲である、尾音にツもルもなか

つた。からエに移つたので、古くは冽の名で今の平壤河を呼んでいたのであらう。

次に樂浪の名稱を考へる、

樂浪も冽も先秦時代、大同江を中心にしてゐた朝鮮國の地名水名である、冽も樂浪も今日は羅行音であるが、思ふに古代の韓民族も名詞の初にラ行音はもたなかつたこと今日の如くであつたであらう。之を冽といつたのは、恐らく朝鮮人が何エといふのを、上を略して支那人が冽としたのでないか否樂浪と同様で樂字の羅行音を奈行音に改めて、ナラ(國の意)といひ列ば之を羅行音にして^{ニシナリ}を^{ニガシナリ}として用ひたのであらう、もしこの假想が適中すれば所謂箕子の朝鮮人は支那文字を使用して、既に自國音で發育し、之を假字としてエ又はナラといふ地名を表示したのであるまいか。

以上は抄録である、しかしこの中に我國語の府をコーとよむことや、大阪の西生郡東成郡といふこと、又は奈良ナラといふ語の古い時代の地名考が潜在してゐると考へてこゝに之を摘要したのである。(F)

新著紹介

○地質鑛物學綱要

田上政敏著 中興館發行四月 菊版
三三一頁+二四頁 定價三圓五〇錢

近來高等學校教科程度の鑛物學書及地質學書の出版される

新著紹介、新著即報

ことの少なくないのは、學徒に取つて甚だ都合のよいことである。それも新進の専門學者によつて著される爲め、新しい學問熱の其の内に盛られるのは一層喜ばしいことである。本書も亦鑛物及地質の高等學校教課に適する様に編まれたもので甚だ要領よく鑛物と地質との一般を説いてある。翻譯著書が少なくなつて來て、日本人達に適つたものが著されてゆくことは最早遅いことではないのであるが、本書も全々翻譯の域を脱して居る。之と共に處々に記し足らぬ句が往々にあるのは一方から見れば外國書の翻譯でないのを示して居ると同時に一つの缺點である。紹介子の時々云つたことのある原語の綴りと文獻にあげた日本の大家の名に誤字が澤山にあるのは見苦しいことである。又原語が獨逸語と英語と混ぜられてあつて入門書としては甚だ不便である。字體を代へて印刷すべきである。かういふ瑕類が改められたなら本書は地學の習得者にとつて甚だ手頃な參考書となるであらう。(S)

新刊即報

○Geologiska Föreningens i Stockholm Föreläsningar. Bd. 51. Häfte 2. 1929.

On the habit of Giantopteris. (T. G. Halle)

○Zeitschrift für Geomorphologie. Bd. N. Heft 3/4 Juli, 1929.